

# 粉川寺

|     |        |
|-----|--------|
| ワキ  | 粉川寺の住僧 |
| ヲカシ | 能力     |
| シテ  | 杉村彈正少弼 |
| 立衆  | 隨行者    |
| 子方  | 梅夜叉    |
| トモ  | 杉村の従者  |
| 地は  | 紀伊     |
| 季は  | は      |
| 雜   |        |

「是は紀州粉川寺の住僧にて候。さても当寺に於て。

年に二夜旅人に宿を貸さぬ大法にて候。其一夜が  
今夜に相当りて候ふ程に。此由を申し付けばやと  
存じ候。いかに能力。

ヲカシ  
「御前に候。」

ワキ  
「汝存じの如く。当寺に於て年に二夜旅人をとめぬ  
夜の候。一夜が今夜に相当りて候ふ程に。かまひ  
て人を寺中にとめ候ふな。其分心得候へ。」

次第  
「其暁を松風や。く。高野の寺に参らん。」

シテ詞  
「かやうに候ふものは。都方のものにて候。さても  
我多年の望みにて候ふ間。紀州高野山に参り候。  
それより粉川寺へも参らばやと存じ候。」

サシ  
「都出でゝ今日瓶の原と詠めける。木津のこつ川は  
是れかとよ。川風あまり身にしめば。我にも衣を  
鹿背山に。思ひつゞけて行く程に。」

シテ  
「さて奈良坂に着きしかば。こゝは法華般若寺。」

立衆

「大聖文珠を拝み申せば。さいしやうはつき雲井坂。

左はいづく東大寺。三国無双の大伽藍。まのあたりに拝む有難さよ。

下歌  
「月の三笠の山の端は。今ぞ知らるゝ春日野の。鹿の音になどか附けざらん。

上歌  
「春ならば。花とやいはん葛城の。／＼。よそに見えたる峰の雲。かゝる旅こそ宇野と聞け。猶行く先はあふかの里。此あたりぞと夕煙。立ち添ふ林を見渡せば。かせいちの森やかまやどの。森ともはやく知られけり。／＼。

シテ詞  
「急ぎ候ふ程に。粉川の寺に着きて候。やがて御堂へ参らうするにて候。いかに誰がある。

トモ  
「御前に候。

シテ  
「はや日の暮れて候ふ程に。寺中に宿を借りて來り候へ。

トモ  
「畏つて候。いかに案内申し候。

ヲカシ  
「誰にて渡り候ふぞ。

トモ  
「是は旅の者にて候ふが。一夜の宿を借り申したく候。

ヲカシ  
「此寺の習ひにて。年に二夜旅人に御宿参らせぬ大法にて候。其一夜が今夜に相当りて候ふ間。御宿はかなひ候ふまじ。

トモ  
「寺中へ御宿の事を尋ねて候へば。当寺の大法にて年に二夜旅人に御宿参らせず候。其一夜が今夜に申し候。

シテ  
「其義ならば苦しからず候。今夜は月も面白く候ふ間。本堂の前の白砂にて一夜を明かさうするにて候。皆々近うよりて物語り候へ。

子  
「あら痛はしや旅人の。いまだ御宿もなげに候。是れ御覧候へ。

トモ  
「いかに申し候。只今幼き人の御通り候ふが。御文

を落し申されて候。

シテ

「何と少人の文を落し給ひたると申すか。殊に当寺は児観音にて候ふ程に。若し御利生の事もや候ふらん。先づ披いて見うずるにて候。いまだ御目にかかりたる事は候はねども。旅に行き暮れ疲れ給ひたる御有様。余りに御痛はしく存じ。一筆申し参らせ候。みづからが古郷は近江の国高島と申しつき。其かたよりと仰せ候ひて御尋ね候はゞ。御坊

も対面あるべし。みづからも左様にあひしらひ申すべし。我名は梅夜叉と申し候。返すぐも御いたはしさの余りにかやうに思ひよりて候。

地  
「やさしの人の心や。いつ馴れぬ花の姿の。色あらはれて此宿の。かりごとぞ嬉しき。たぐひなの人  
の心や。

シテ詞

「さて何とし候ふべき。

トモ  
「其御事にて候。只今御越なくは。梅夜叉御の御志

も徒らになり候ふ間。仮名字にて御出あれかしと  
存じ候。

シテ 「さらば其由申し候へ。

トモ 「畏つて候。いかに案内申し候。高島殿の御宿坊は  
いづくにて候ふぞ。

ヲカシ 「是にて候。

トモ 「高島殿の只今御登山にて候。

ヲカシ 「其由申さうするにて候。いかに申し上げ候。高島

殿御登山にて候。

ワキ 「何と高島殿の御登山と候ふや。あら思ひよらずや。  
此方へと申し候へ。

ヲカシ 「畏つて候。此方へ御出で候へ。

トモ 「心得申し候。いかに申し候。其旨申して候へば。  
あれに御通りあれとの御事にて候。

シテ 「さらばかう参らうするにて候。

ワキ 「御登山めでたう候。

シテ

「さん候とくにも登山いたし御礼申すべきを。公私

ひまなきに付いて遅なはり申し候。殊に幼きものを参らせ置き。万づ御むつかしき事恐れ入り存じ候。

ワキ

「委細承り候。只今の御登山祝着申し候。いかに梅夜叉殿此方へ御出で候へ。殊の外の成人にて候。

シテ

「誠に殊の外成人仕りて候。

ワキ

「又梅夜叉殿御舎兄は比叡山に御童形にて候ふか。

御出家を遂げらるゝとも申す。又御下りあつて家を御相続とも申し候ふが。何れか一定にて候ふぞ。

シテ

「さん候いでそれは。

子

「あら心なの仰やな。しばし休ませ申すべきに。

地  
「長物語よしそなき。明けなば帰る古里の。遠旅も痛はしやと。みづから酌を取り。御客人にすゝむる。

シテ

「げにや情は有明の。

地

「月の都に住みなれて。人こそ多けれど。かゝるや  
さしき事はなし。京に田舎あり。田舎にも又都人  
の。心ざまはあるべしや。道すがらの思出。げに  
忘れがたの風情や。

トモ詞  
「はや鳥が歌ひて候。

シテ詞  
「何とはや夜の明方に候ふとや。さらば御暇申さう  
するにて候。

ワキ  
「暫く。たま／＼の御登山にて候ふ程に。御逗留候

ひて御慰み候へ。

シテ  
「御意にて候ふ程に逗留申したく候へども。路次に  
人と堅く契約申したる事候ふ間。先づ此度は罷り  
帰り。又近日罷り下り御礼申すべく候。

ワキ  
「さては御立ちなうては叶ひ候ふまじきか。あら是  
非もなや候。重ねて御登山を待ち申さうするにて  
候。いかに梅夜叉殿。はや御かへり候御門送り候  
へ。

子「心得申し候。」

シテ  
「いかに申し候。さても今夜は草の枕に臥すべく候ふ処に。御憐みにより一夜を明かさせ給ふ事。生々世々忘れ申すまじく候。必ず十日の内には罷り下り。今夜の御礼申すべし。さるにても昨日の暮の隠し文。」

地  
「思はぬ方に節竹の。一夜の契り夢うつ。粉川の寺の鐘の声鳥の音。あら忘れがたの面影や。」

シテ詞  
「いかに誰かある。某が参りたる由申し候へ。」

トモ  
「畏つて候。いかに御坊へ案内申し候へ。」

ヲカシ  
「誰にて渡り候ふぞ。」

トモ  
「高島殿の御登山にて候。」

ヲカシ  
「いかに申し上げ候。又高島殿御登山にて候。」

ワキ  
「此方へ入れ申し候へ。あらめでたや御下りにて候。」

シテ  
「先度の御礼のため参りて候。さて幼き人は何処に御座候ふぞ。」

ワキ  
「是に渡り候。」

シテ  
「情は人の為めならず。」

地  
「よしなき人に馴れ初めて。出でし都も。忍ばれぬ程になりにけり。」

ワキ詞  
「重ねて御登山祝着申し候。以前は仮名字にて御出のよし承り候。此度は誠の御名字を御名乗り候へ。シテ「仮名字に付きて面白き曲舞の候ふ程に歌ひ。其時名のり候ふべし。」

サシ  
「吉野山の花見の行幸には。妹脊の中を離れ。」

地  
「須磨明石の月に休らふとても。三年の日数を徒らに過し。其後筑紫筑前に下り。朝倉の里といふ処に。暫く御座をなし給ふ。」

クセ  
「茆茨根を切らず。さいてん削らずして。黒木に作る宮柱。立つ木の枝もおのづから。すなほになれば君が代に。住む事やすき例とて。其まゝ住ませ給ひしかば。それより名づけつゝ。木の丸殿と号

すなり。世につゝむべき事あり。たゞ人の如く天皇や。豊の明りの影すゞぐ。忍びて住ませ給ひしに。参る人は必ず。其名を名のり帰るべしと。綸言の趣。和歌の浦波朝倉や。

シテ「木の丸殿に我居れば。

地「名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ。かやうに詠じ給ひしかば。其後参る人は。言問はづ名のりけり。げにやかしこき世語りの。遠き喻へも恐れあり。

我等もいざや名乗りつゝ。名のりの為めと木綿附の。とりあへぬ御酒盛。いざ歌ひ奏で遊ばん。

ロング地「げに面白やさこそげに。都人の舞の袖。ゆかしやと囁せば。

シテ「たをやかなりし舞の袖。老木の花はめづらしや。御覧あれやかたぐ。

地「若木によらぬ舞の袖。老木の花はめづらしや。

シテ「さらば思出に。幼き人と諸ともに。相舞ならば舞

はうよ。

地 「げに相舞は殊更。互の心花染の。

シテ 「恐れある御袖を。引きたつる袂も。

地 「引かるゝ袖もたをやかに。ゆたかなる君が代なり。

歌ひ奏で舞人の。さもめでたくぞ覚ゆる。

シテ 「いつか紀の路の山高み。

地 「雲こそつゞけ旅の空。 (舞)

ワキ詞 「なふく此度は実名を早く御名のり候へ。

シテ 「今は何をかつゝむべき。是こそ杉村彈正の少弼候  
よ。

ワキ 「あらおびたゝしの大人や候。

シテ 「さても幼き人の御事を。我君へ申し上げ候へば。

急ぎ御供仕れとの御事により。只今御迎ひに参り  
て候。

ワキ 「さては幼き人只今が名残にて候ふよ。

シテ 「中々の事。忘られぬ時忍べとや浜千鳥。

地  
「ゆくへも知らぬ。

シテ  
「人を尋ねて。

地  
「月の夕暮花の曙。事によせ折々ごとに。忘るまじ  
や忘らるまじの。あらまし残す。有りし情は露の  
玉づさ。言葉も尽せぬ名残かな。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第六輯』大和田建樹著